

基礎と臨床が ともに学ぶ場をつくる 自治体が協力するケースを中心に

臨地実習を行う以上、学校と臨床現場でのコミュニケーションは欠かせません。しかし、よい看護師を育てたいという目標は同じであっても、立場の違いからその進め方は常にさまざまな問題をはらんだまま、今に至っています。また、卒業生の能力評価の統一や基礎・臨床がそれぞれ抱える課題の情報共有も十分とはいえない状況かと思えます。

今回は、基礎と臨床がともに学ぶ場をつくり、そこで複数の学校、複数の臨床現場がそのつながりを深める関係づくりについて取り上げます。特に、自治体という大きなくくりのなかで、基礎と臨床が意思疎通を図ることにより、実習とその後の就職にとってもよい影響が生じているという結果は、今後の合同研修の推進を加速してくれるでしょう。学校と病院一対一の関係を深化することも重要ですが、学校や病院が横のつながりをもてるという意味で、このような試みには大いに意義があると考えます。

1つの学校や病院でできないことも、スケールメリットを生むことで実現できる可能性もあります。ぜひとも、他の自治体でも今回のような試みがスタートできることを期待しています。

なお本企画は、基礎教育側からを弊誌が、臨床側から『看護管理』が、同じ11号で取り上げます。ぜひとも併せてご覧ください。